

大手前学園伊丹キャンパスにおける情報教育関係 スチューデント・アシスタントの実態調査報告

野 波 侑 里 中 崎 修 一 佐々木 英 洋
大 塚 智津子* 浦 畑 育 生 小 野 厚 夫

An Investigation into the role of Student Assistant in Information
Technology Education at Itami Campus of Otemae University

NONAMI Yuri / NAKAZAKI Syuichi / SASAKI Hideyo

OTSUKA Chizuko / URAHATA Ikuo / ONO Atsuo

0. はじめに

大手前学園伊丹キャンパスに位置する大手前女子短期大学では、平成8年2月に学術情報ネットワーク（以下 OCNET と呼ぶ¹⁾）を構築した。それに伴い情報教育の授業補助者として学生を活用するスチューデント・アシスタント（以下 SA と呼ぶ）制度を導入することにした。大学院の学生を教育や実習の助手として活用するティーチング・アシスタント（以下 TA と呼ぶ）制度は多くの大学で採用されているが、当時の伊丹キャンパスは短期大学の2学科編成であったため、アシスタントとして短期大学の2年生を数名採用した。そのモデルとなったのは、慶応義塾大学藤沢キャンパスの SA 制度であった。OCNET の開設にあたり藤沢キャンパスに見学に行き、ネットワークおよび SA 制度について様々なアドバイスを受けた。

平成12年に伊丹キャンパスに四年制大学の、共学の新学部として大手前大学社会文化学部が開設され、その際新入生の中から比較的パソコンの知識を持つと思われる男子学生を SA として採用し、短期大学女子2年生の SA と一緒に新入生が SA の業務を遂行する試みを行った。その後4年経過して社会文化学部も4年生までの在学生在が揃い、SA の登録学生数も22名に増大した。

※元大手前女子短期大学教員

OCNET が開設されてから最初の4年間は、情報教育関係の教員と SA とでネットワークを管理・運営してきたが、その後ネットワーク管理者として職員2名が採用された。さらに、OCNET の導入から8年目の平成15年に、念願であった学園の情報基盤センターが正式に立ち上がり、学園の OCNET のサポート体制もようやく整いつつある。伊丹キャンパスの総学生数は1572名（平成15年10月現在）で、全ての学生がパソコンを使用しているが、ネットワーク管理・運営に携わる専任職員はわずか2名であり、これまで SA の果たしてきた役割は極めて大きい。

いろいろと試行錯誤しながら続けてきた SA 制度であるが、この制度がどの程度有効に機能しているか否かを調査するために、平成13年から平成15年までの3年間、学生を対象に SA 制度の実態についてアンケート調査を行い、また SA 本人にも仕事に対する感想をアンケート形式で質問聴取してきた。

本稿では、伊丹キャンパスにおける SA 制度の現状を報告すると共に、過去3年間に実施された SA 制度の実態調査のアンケートをまとめることによって現在の SA 制度の問題点等を割り出し、今後の SA 制度のあり方について考察することにした。

1. 情報教育の SA 制度

1. 1 仕事内容

平成14年度における SA の総勤務時間数を表1に示す。この表に示したように、情報教育における SA の仕事内容は5つに大別することができる。勤務時間数の多い順にその内容を紹介する。

仕事内容	勤務時間数
自習室の質問受けと教室管理	2,325時間10分
授業アシスタント	590時間40分
教員の質問対応	147時間15分
学生ノートパソコン対応	60時間45分
その他（年間行事他）	170時間35分
合計	3,294時間25分

表1 平成14年度 仕事内容別勤務時間数一覧

まず第1は自習室における学生からの質問受けと教室管理である。実習教室は4室（パソコン総数272台）であるが、学生には自習用として最低1教室を月曜から金曜の午前8時から午後8時まで、土曜日は午前10時から午後6時まで開放しており、さらに授業のない空き教室はその時限に限り自習用とし開放している。自習教室には SA を1名待機させ、

学生の質問受けと教室の管理をさせている。また夏休みや春休みなどの期間にも自習室を開室し、SA が教室管理している。

第2はパソコン実習関係の授業アシスタントである。最小20名から最大56名の学生が受講している授業に1名のアシスタントを割り当てている。

第3は一般教員からの質問受けである。伊丹キャンパスでは学生の情報活用能力向上のため、教員にも学生との連絡等にメールやウェブページを活用するよう奨励している。このため、パソコンに不慣れな教員へのサポートが非常に重要な仕事のひとつとなっている。

第4は、学生が個人所有しているノートパソコンに関する質問受けである。社会文化学部では学生全員に対しパソコン所持を義務づけているため、「OCNET へ自宅からダイヤルアップ接続できない」などの OCNET に関する質問や、ウィルス対策等の質問に応じている。

第5は、その他の仕事で新入生の情報教育クラス分けテスト、新入生オリエンテーションやオープンキャンパス、臨時講習会のアシスタント等の年間行事に対するサポートである。各仕事内容に関する問題点などについては、第2章で検討する。

今後は、教員の教材や資料の作成をサポートするチームを作る予定であるが、教員の仕事をどこまで引き受けるか等、問題点も多くまだ体制が整っていない。今後の大きな課題の一つである。

1. 2 SA のサポート体制

SA は情報教育関連教員の推薦および一般公募で面接の上採用してきた。任期は1年で、毎年3月に SA に対して更新の意思を確認している。平成15年11月現在、SA として登録している学生は22名で、その学年別内訳は社会文化学部4年生5名、3年生6名、2年生7名、1年生2名、短期大学2年生2名である。社会文化学部が完成年次に達したため、過去最大の登録人数になった。特定の学生に仕事の負担が偏ったり、勉学の妨げにならないように、勤務時間は一人当たり週10時間程度、月40時間以内に制限している。また年間行事では同時に多人数の SA を動員する必要があるため、できるだけ多くの学生を SA として確保する方針で運用してきた。

SA が円滑に仕事をできるように実施していることが二つある。まず一つは SA 専用のメーリングリストの活用である。SA は仕事の終了時にメールで当日の仕事内容や状況を報告する。また問題が起こった時には随時メールで報告して、早期に問題をお互いに情報交換しながら解決できるようにしている。情報基盤センターの職員および情報教育関係教員と SA の間で緊急連絡や問題点などの情報が即時に共有できるため、メーリングリストは非常に有効な手段となっている。

もう一つは毎週一回昼休みに SA 会議を実施していることである。この会議は SA 制度

開設の当初から継続して開催されている。週一回、情報教育関係の教職員と SA 全員が顔を合わせることで、メールでは未解決となった問題点の討論、トラブル解決法の情報交換の他、SA の悩みや不満を直接聞くことができ、有効な時間となっている。

情報関係の業務では特にウィルス対策など、緊急に情報を共有する必要がある内容が多いため、この二つの方法は今後も継続することが必要であろう。SA 会議の進行は3年生のリーダーが行い、SA 全体のまとめ役を果たしている。

SA 制度は導入当初から教員が前面に立って指導をしてきたが、15年度になって4年生までの SA が揃ったことにより、上級生が下級生にアドバイスする関係もようやく定着してきたように見受けられる。また昨年度より SA 同士の勉強会も少しずつ始められている。

伊丹キャンパスでは今年から情報教育以外の授業等にも SA が導入されるようになった。これまでに蓄積された情報教育の SA 制度を基にした SA 規定が新たに制定され、伊丹キャンパスに SA 体制が定着しつつある。SA の出退勤管理やシフト調整などの勤務管理は、現在伊丹キャンパスの共同研究室の職員が実施している。

2. 学生へのアンケート調査および結果報告

平成13年度から平成15年度までの3年間の後期に、伊丹キャンパスの全学生（大学生と短期大学生）を対象に、学生が SA に対してどのように感じているか実態調査を実施した。

大学の社会文化学部は平成12年度開設の新学部のため、平成13年度の3・4年生と14年度の4年生は短期大学からの編入生だけで、人数も数十名程度であり、回答した学生数に偏りがある。平成15年度に4年生までの全学生数がはじめて揃ったことになるので、今回はまず平成15年度のアンケート結果を中心に考察し、それが3年間でどう変化しているかを見ていくことにしたい。

アンケート調査概要は下記のとおりである。

- ・ 調査の目的：学生の情報スキルの向上に SA が有効利用されているか
- ・ 調査対象：大手前学園伊丹キャンパス在籍の在学生（全学年）
- ・ 調査方法：学内配布・回収
- ・ 有効サンプル数：

年 度	全学生数	回答学生数			回答率
		社会文化学部	短期大学	小 計	
平成13年	1,111	488	215	703	63%
平成14年	1,323	600	282	882	66%
平成15年	1,572	717	374	1,091	69%

- ・ 調査期間 : 平成13年11月、平成14年11月、平成15年10月の3回、同じ内容で実施
- ・ アンケート用紙: 質問内容13項目および自由記述。別紙1参照

以下、各項目について平成15年度の結果および3年間の変化を考察する。平成15年度の結果については伊丹キャンパス全体、社会文化学部別の学年別、そして短期大学の学年別に集計し、また3年間の変化については年度別にキャンパス全体の割合をグラフにまとめた。

2. 1 自習時間について

問1から問5は、自習時間に関する質問に対する結果である。

問1. 「SAに、あなたから質問や相談をしましたか。」

図1がその結果である。キャンパス全体の回答者のうち、約7割の学生がSAに質問や相談をしたことがあると答えている。また、学年別では低学年ほど多いのではないかとこの予想に反し、どの学年もほぼ平均して質問していることがわかる。大学と短期大学の比較では短期大学の質問率が低いのが、これはパソコンを使う頻度によるものと考えられる。3年間の調査では、ほぼ同じ結果が得られた。3年間を通し、また各学年を通して、全体で約6割から7割の学生が自習室でSAに質問をしたことになる。

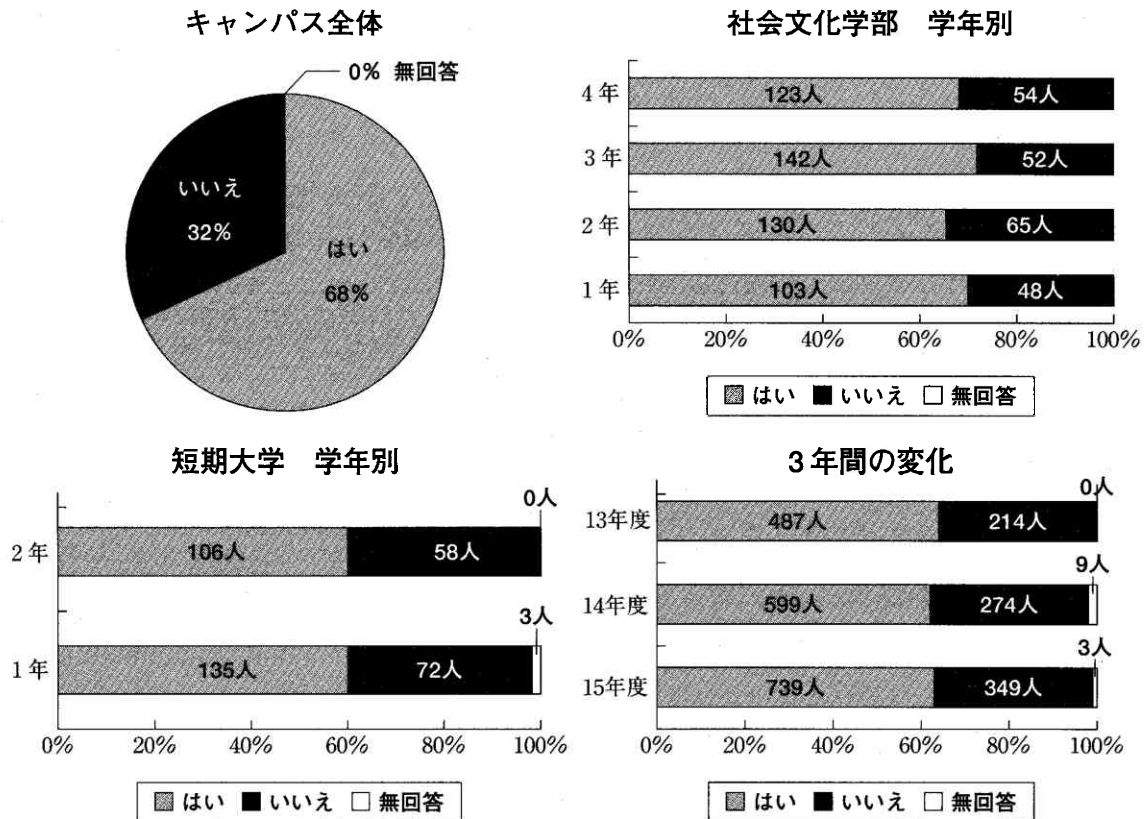


図1 [自習時間について] SAに、あなたから質問や相談をしましたか。

問2. 「SA は、あなたが質問したい時に自習室にいましたか。」

図2がその結果である。この質問の目的は、自習室つまり空き教室の室数に関係なく、SAを1名しか配置してないため、この配置人数が適当だったかどうかを確認することにあった。全体で約30%がいないと感じている。特に高学年の方が自習室にいないと感じている傾向が高い。教室や教員研究室に配置されている機器のトラブルで、教員に緊急に呼び出されたり、他の教室を見回ったりすることもあるため、どうしてもSAが不在の時間帯が生じる。空き教室つまり自習室となる全ての教室にSAを置くのが理想であろうが、実際には時間帯によっては数名しか自習をしていない場合もあり、平均するとSAが各教室で常に質問に追われている状態にはなっていない。したがって学生から要望はあるものの、現状で自習室にSAの配置人数を増やすことは今後の検討項目としたい。

3年間の結果では、無回答の学生が増えただけで、あまり変化はない。この質問に関しては、問11でさらに検討する。

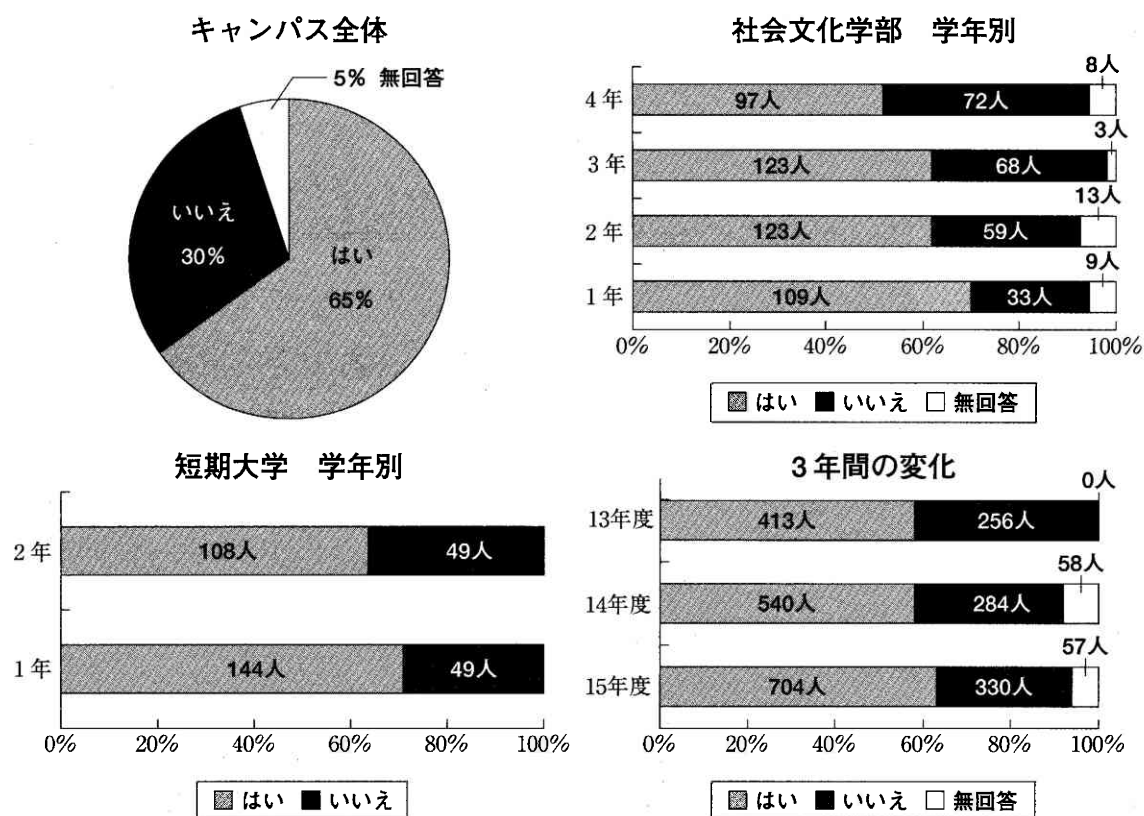


図2 [自習時間について] SA に、あなたが質問したい時に自習室にいましたか。

問3. 「SA は、あなたの質問に適切に答えましたか。」

図3がその結果である。全体では、「非常に良かった」と「まあまあ良かった」を合わせると86%と良い結果であった。学年別に見ると高学年の方が少し厳しい評価をしている。おそらく高学年になると本人のスキルも向上し、質問内容も高度になるためSAでは対応

できない問題が増えるためと考えられる。SA は大学院生の TA とは違い、同じ学年あるいは本人よりも下の学年のアシスタントが対応することもあるため、このような結果が出るのは当然かもしれない。この問いに対しては無回答の学生が多かった。

3年間の変化では、「非常に良かった」と「まあまあ良かった」の合計が年々良くなる傾向にあるが、「非常に良かった」という回答率が低くなっていることが気になりである。このことについては、自由記述欄の結果と併せて考察する。

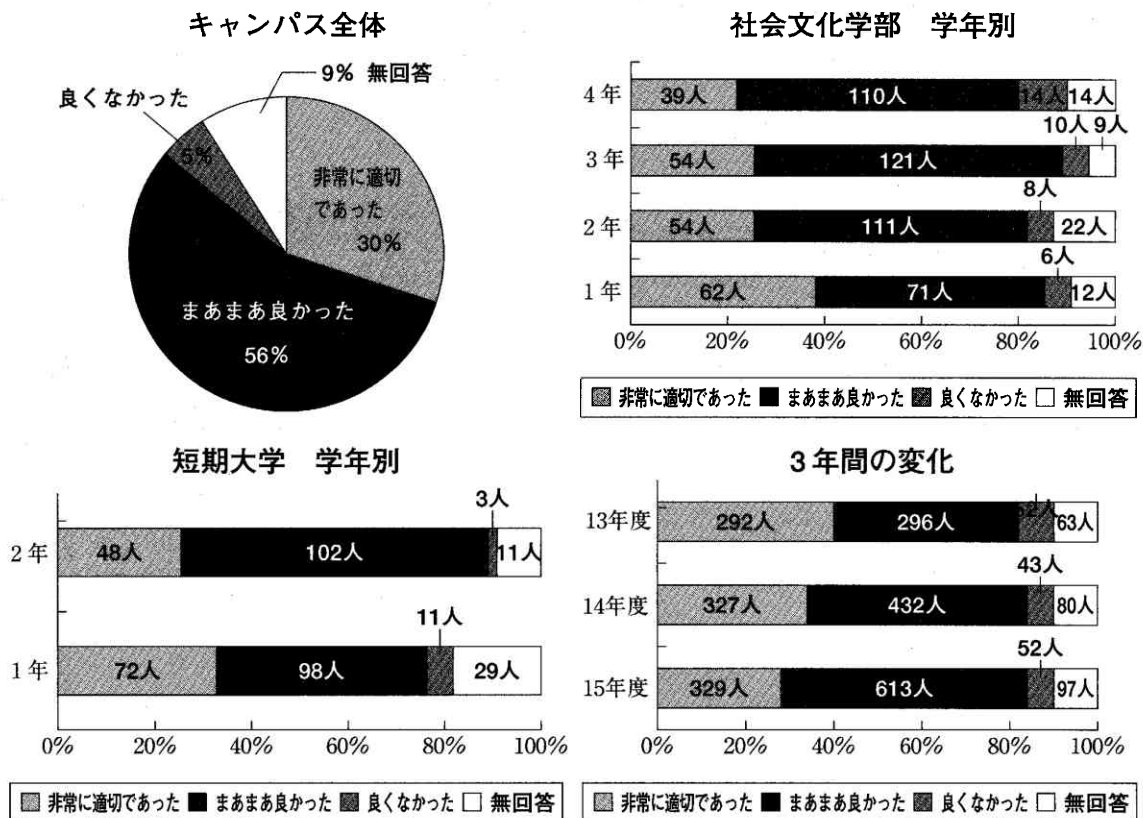


図3 [自習時間について] SA に、あなたの質問に適切に答えましたか。

問4. 「SA の存在があなたの役に立ったと思いますか。」

図4がその結果である。全体では「非常に役に立った」「まあまあ役に立った」を合わせると87%と良い結果であった。特に低学年の方が「非常に役に立った」と答えた割合が高いことがわかる。「いなくても同じ」と回答している人が数パーセントあるが、この割合は学年が上がるにつれて増えている。SA がいなくても自分で対処できるようになったからと判断したい。

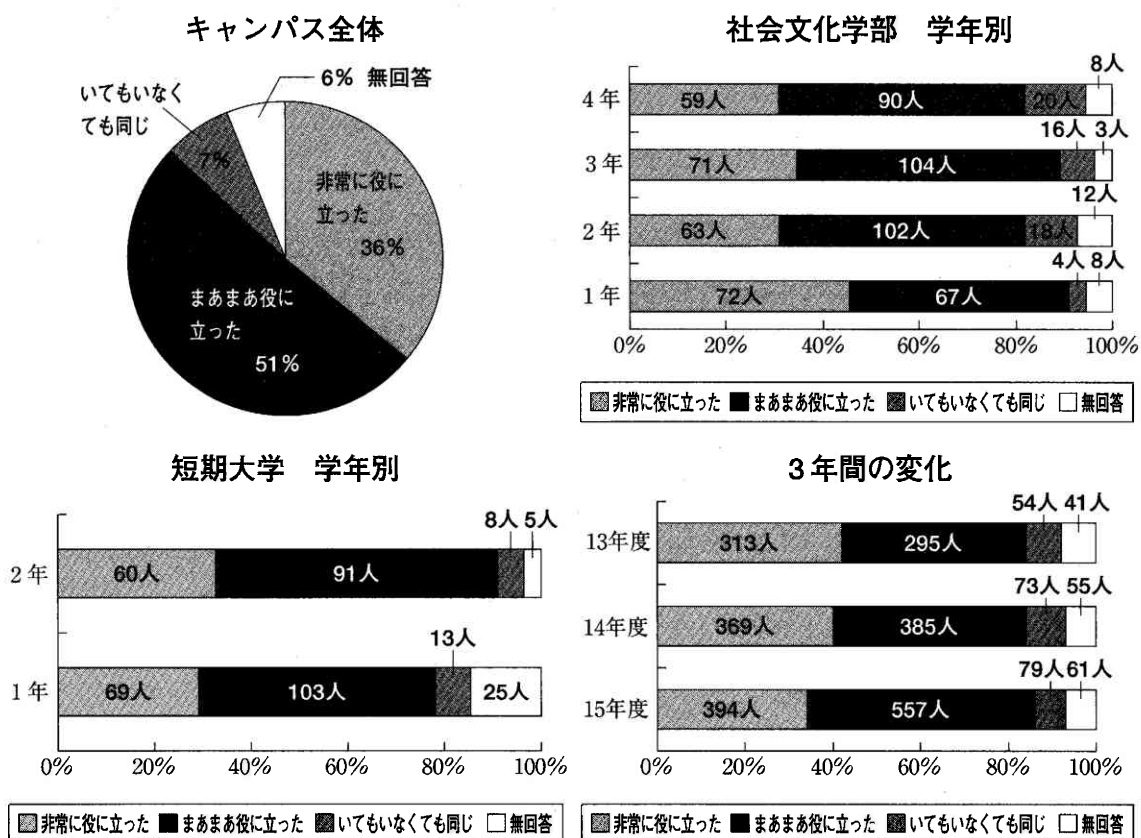


図4 [自習時間について] SAの存在があなたの役に立ったと思いますか。

問5. 「あなたは、SAに質問しやすいですか。」

図5がその結果である。全体では「はい」が20%で、少ないように感じる。「ふつう」は60%であるが、「いいえ」の割合も16%と比較的多い。学年別では、「はい」「いいえ」共にばらつきがあり、判断しにくい結果となった。

3年間では「はい」の数が減っていることに注目したい。この項目は自由記述欄の内容と対応させて考察する。

以上のように自習時間のSAの存在は、大きな視点で見ると学生にとって有効な存在であることは間違いのないところであるが、気軽に聞ける雰囲気があるのか、質問に適切に答えたかについては、満足していない学生がいる。また全体的に「非常に良い」が年々減っているのは、高学年の割合が増えたために評価が厳しくなったためと考えられる。

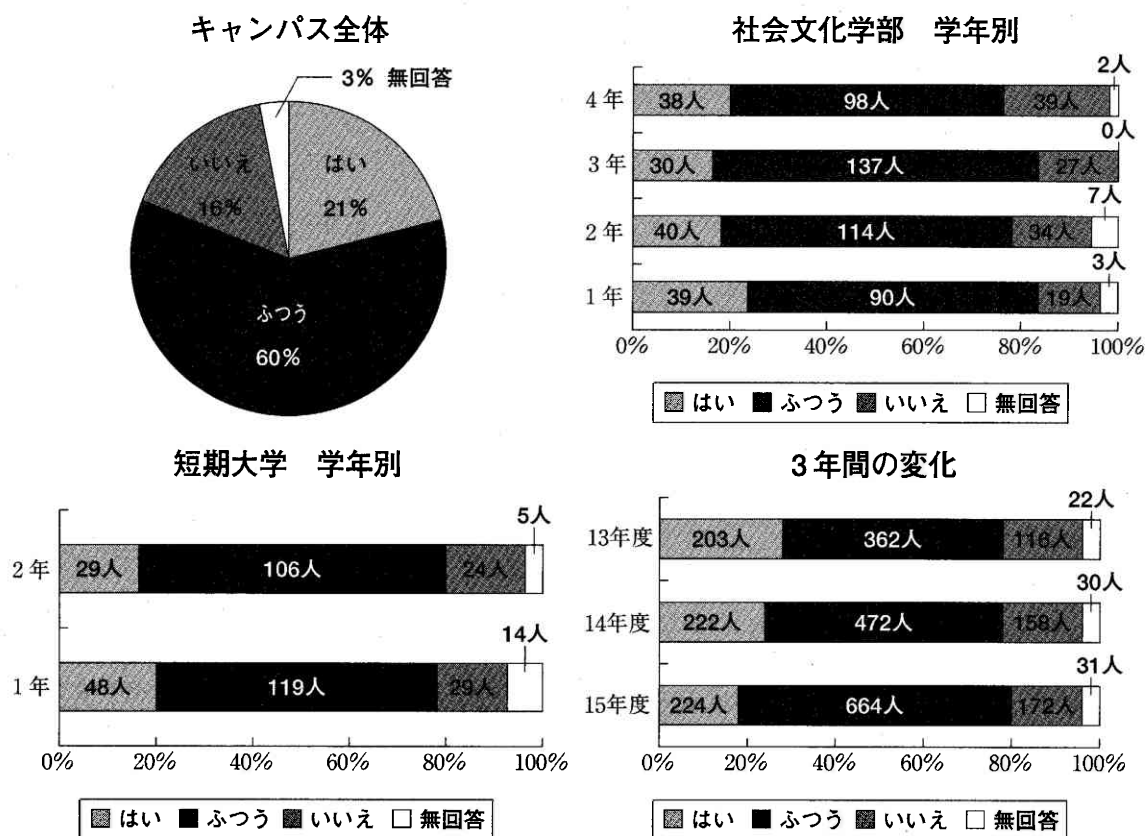


図5 [自習時間について] あなたは、SAに質問しやすいですか。

2. 2 授業アシスタントについて

問6から問8は、授業のアシスタントとしてのSAの仕事に関する学生の答えである。

問6. 「SAは、質問に適切に答えましたか。(質問した人のみ答えてください)」

図6がその結果である。全体では「非常に適切であった」が42%であり、「まあまあ良かった」の55%と合わせると97%に達する。自習室の質問応対よりもかなり良い結果であった。授業は、内容が決まっていることからSAも事前に勉強することもでき、質問内容や学生が間違いやすい点などが予想しやすく、SA自身も対応しやすいのであろう。社会文化学部、短期大学の学生共に、「非常に適切であった」の割合が高いことから、1年生にとって授業のSAは非常に重要な役割を果たしていると判断できる。

3年間では、他の設問と同様に「非常に適切であった」の割合が低くなってきている。

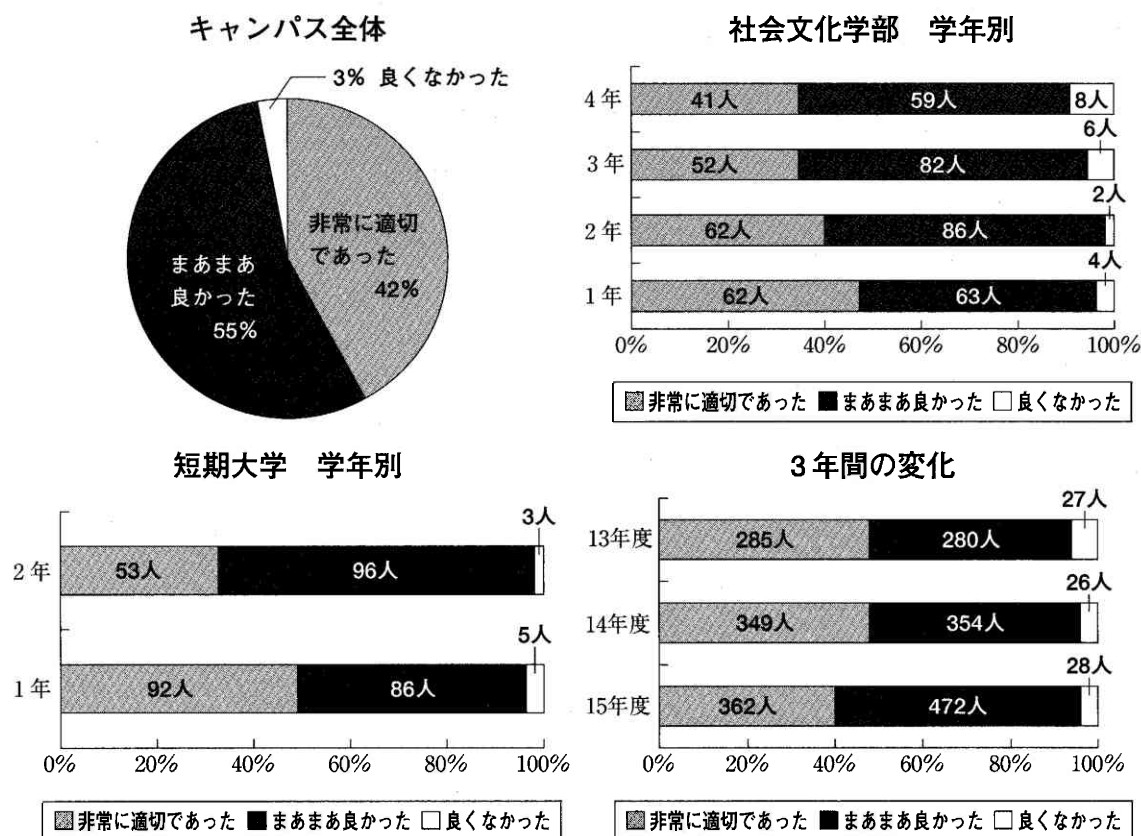
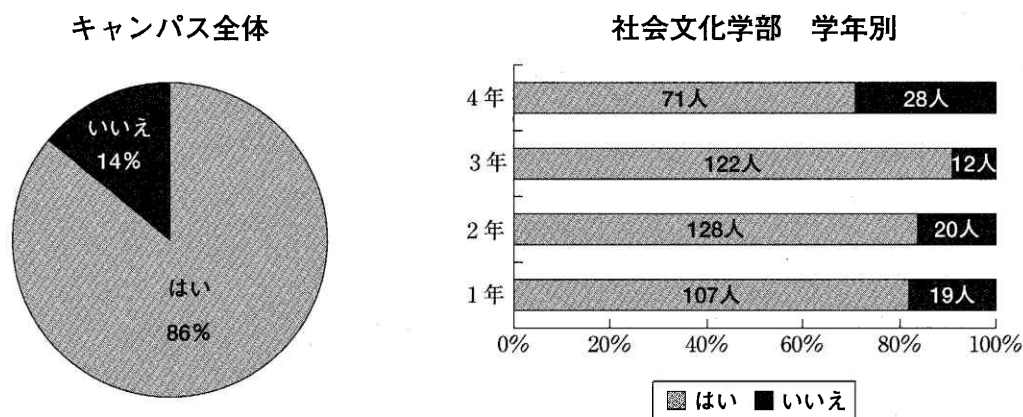


図6 [授業アシスタントについて] SAは、質問に適切に答えましたか。(質問した人のみ教えてください)

問7. 「SAがいることで、スムーズに授業について行くことができましたか。(質問した人のみ教えてください)」

図7はその結果である。全体では86%が「はい」と答えている。特に低学年でSAのサポートが授業の進行に役立っていることが明らかになっている。また3年間では、この項目で「はい」と答えた割合が上がってきており、望ましい傾向である。



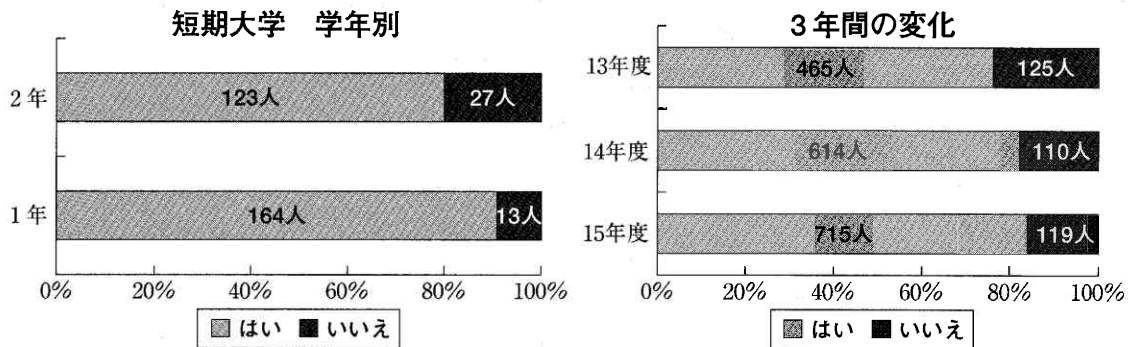


図7 [授業アシスタントについて] SAがいることで、スムーズに授業について行くことができましたか。(質問した人のみ教えてください)

問8. 「SA と担当教員の連携はうまくいっていると思いませんか。」

図8がその結果である。「うまく行っていると思った」は42%、「何も感じなかった」は55%と高い割合を占め、授業における SA の役割が学生に何等抵抗なく受け入れられている様子を示している。この割合は3年間でほとんど変化がない。「良くなかった」の割合が非常に少ないことが評価できる。

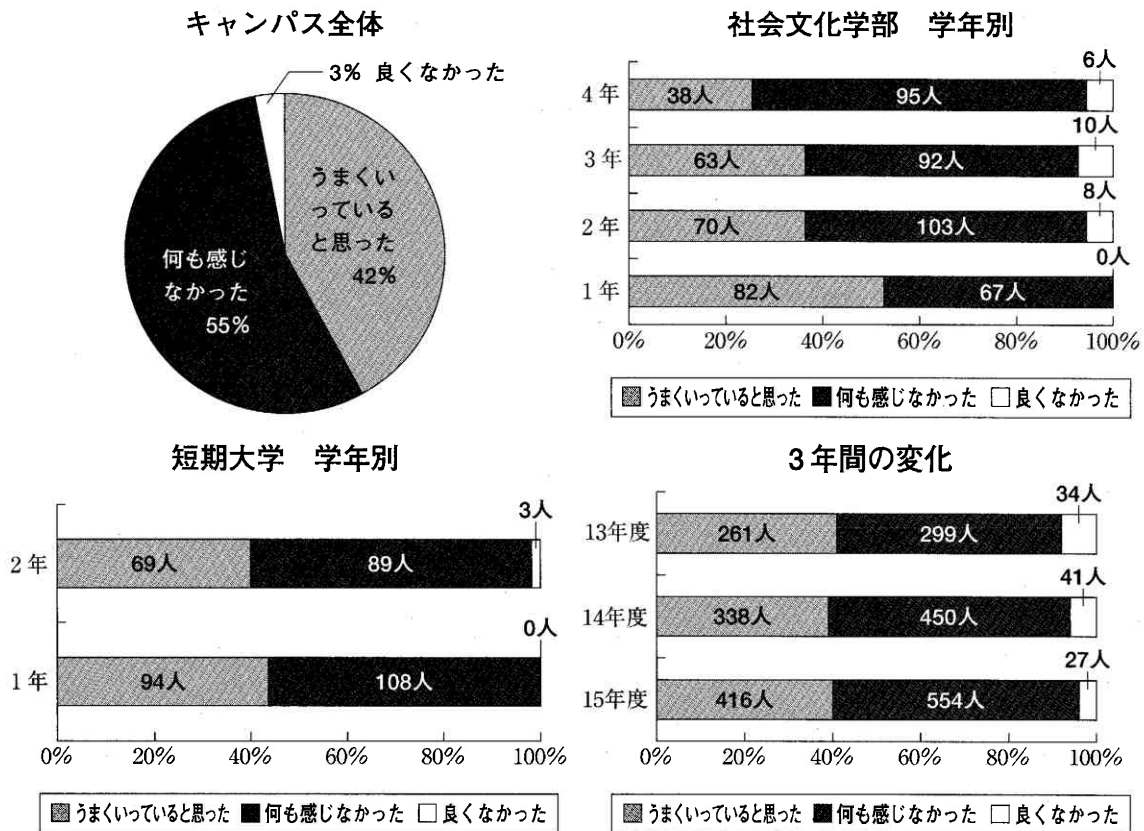


図8 [授業アシスタントについて] SA と担当教員の連携はうまくいっていると思いませんか。

2.3 SAのスキルについて

次の項目はSAのスキルについて学生がどのように感じているかの答えである。

問9.「SAは専門知識やスキルを持っていると思いますか。」

図9がその結果である。「はい」と答えた人が54%である。「ふつう」と答えた人を合わせると98%で、「いいえ」と感じた人は少ない。この項目で低学年の方が「はい」と答えた割合が多いのは順当な結果であろう。3年間を通した結果では、「はい」の割合が減っているのも順当であろう。「スキル」の問題については、「自由記述欄」でさらに検討する。

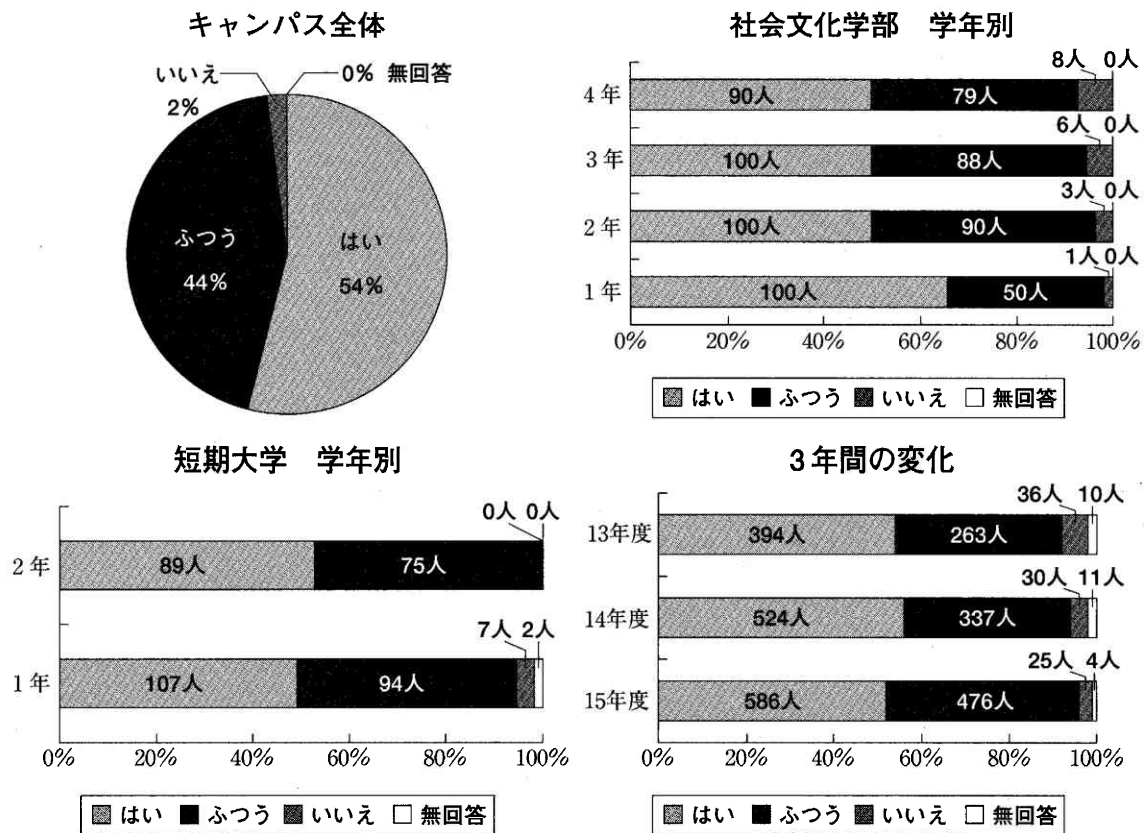


図9 [SAのスキル] SAは専門知識やスキルを持っていると思いますか。

2.4 SAの必要性について

次は、SAを必要と感じているかどうかについての答えである。

問10.「SAは必要だと思いますか。」

図10がその結果である。「非常に必要である」と答えた割合が全体の46%と非常に高く、さらに「まあまあ必要である」と答えた割合と合わせると全体の98%に達し、非常に好ましい結果となった。この問いに対しても低学年の方がより必要性を感じていることがうかがえる。

3年間では、15年度に「非常に必要である」が減っているが、15年度には上級生の回答が含まれているのに対し、13年度と14年度では3、4年生の在校生が少数で、当時の回答者の多くは1、2年生だったことによるものと判断される。この結果からも、低学年のSAに対する必要性が読み取れる。また3年間を通して、「必要でない」と答える学生が非常に少ないことも評価できる。

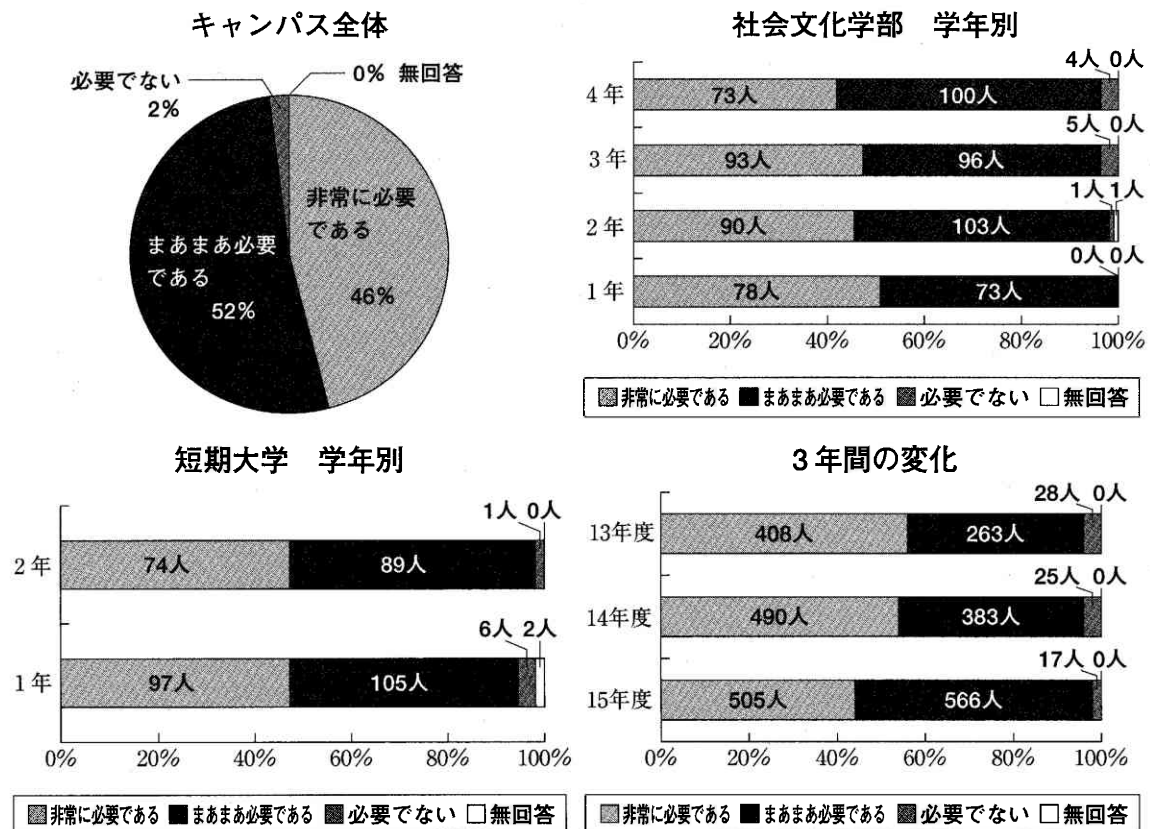


図10 [SAの必要性] SAは必要だと思いますか。

問11. 「自習時にSAが必要だと思った人のみ回答してください。」

図11がその結果である。「もっと多い方が良い」が29%であるのに対し、「適当である」が61%であった。社会文化学部では、「もっと多いほうが良い」と感じている人の割合が1年生で多いのに対し、短期大学では2年生の方が多い。また1年生で無回答の割合が高い。この問いについてはどのように答えてよいのか判断に迷った学生が多かったように見受けられる。

今後も、期末のレポート期限の重なる時期など、自習室の稼働率の高い期間には臨機応変に要員を増やす方向で考えていきたい。

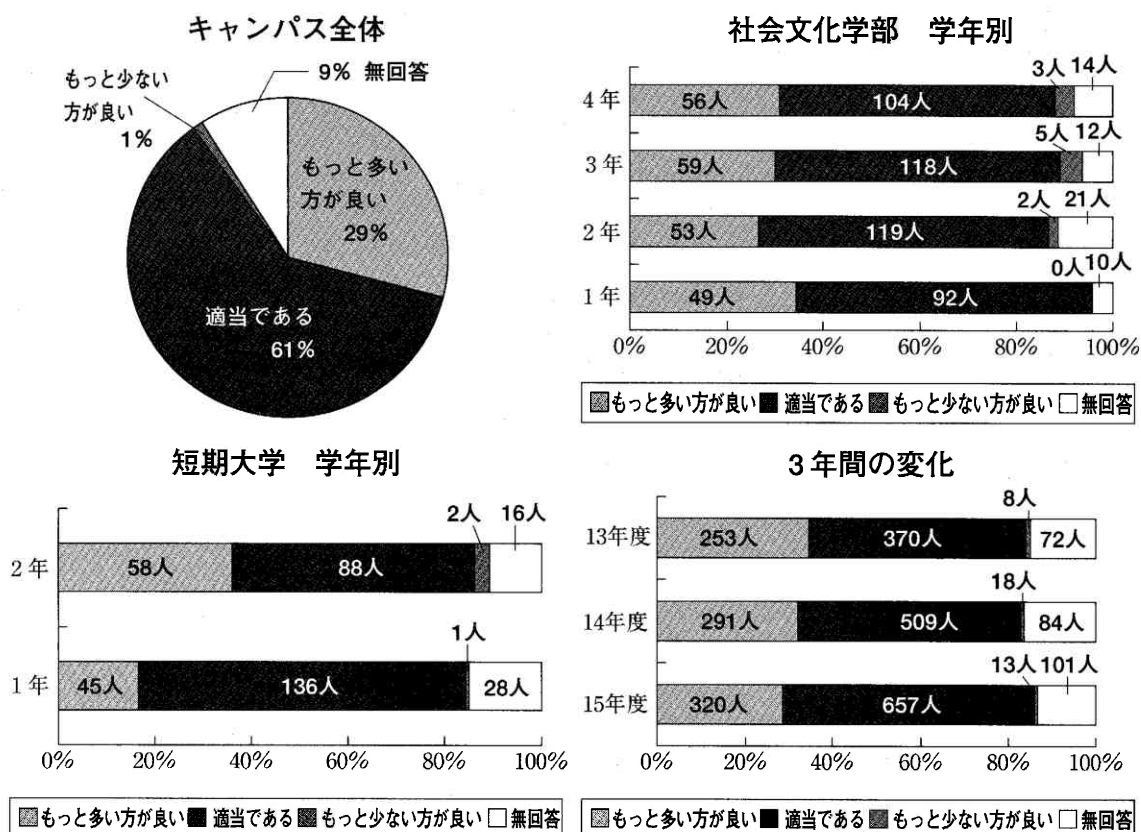


図11 [SAの必要性] 自習時にSAが必要だと思った人のみ回答してください。

2. 5 あなたの態度について

次の2問は、SAへの感想ではなく、パソコン教室を使うにあたって本人のマナーを問うものである。

問12. 「あなたは、実習室のルール（飲食厳禁など）を守っていますか。」

図12がその結果である。「はい」と答えたのが全体の92%である。「いいえ」と答えた割合を見ると、上の学年になるに従ってその割合が増えているのは問題である。ルールを守らないことで常に問題になるのが、自習室への飲食物の持ち込みや、OCNETで禁止しているパソコンへのインストールやネットゲームなどである。見つけ次第注意するように指導しているが、対象者が上級生だったりして、実際には注意しづらいようである。ポスターなどで注意を促すなど、様々な工夫をしているが全面解決することがなく、SA会議においても上級生の行動が問題になることが多い。

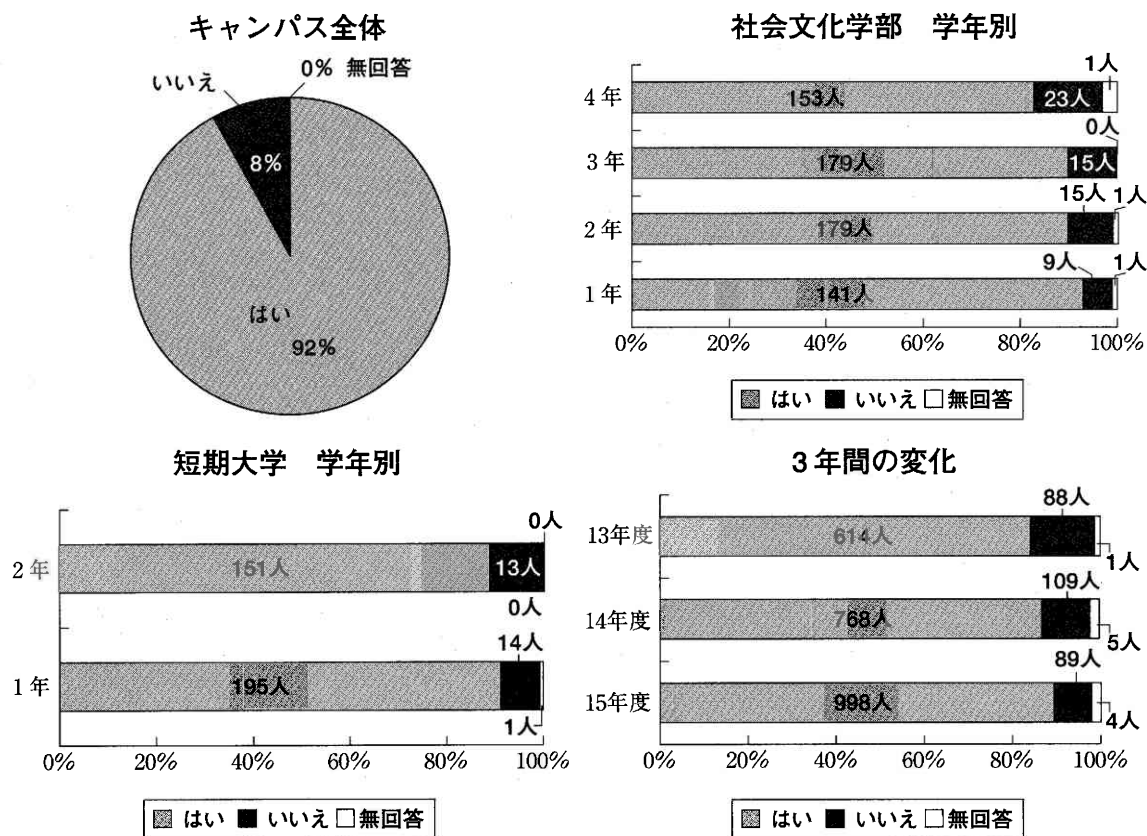
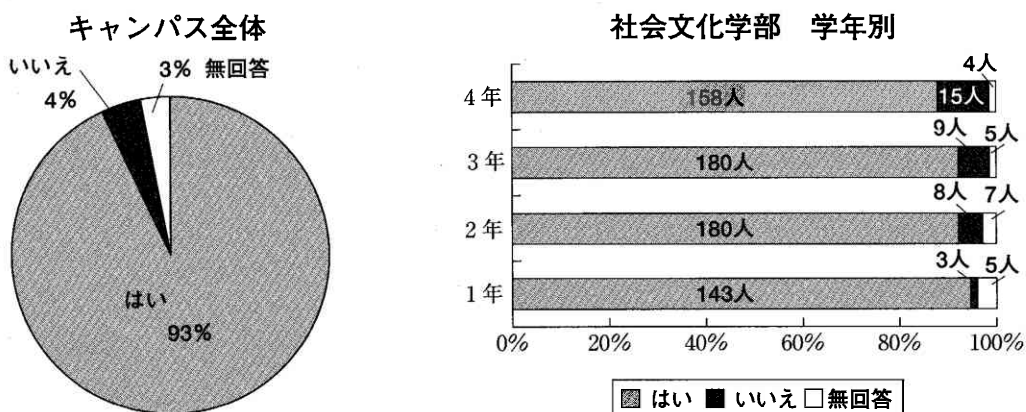


図12 [あなたの態度について] あなたは、実習室のルール（飲食厳禁など）を守っていますか。

問13. 「あなたは、SA からの注意を素直に受けていますか。」

図13がその結果である。「はい」と答えた割合が93%と高いが、この問いについても問12と同様、高学年になるに従って「いいえ」の割合が高くなっている。今後もこの割合については注目していく必要がある。



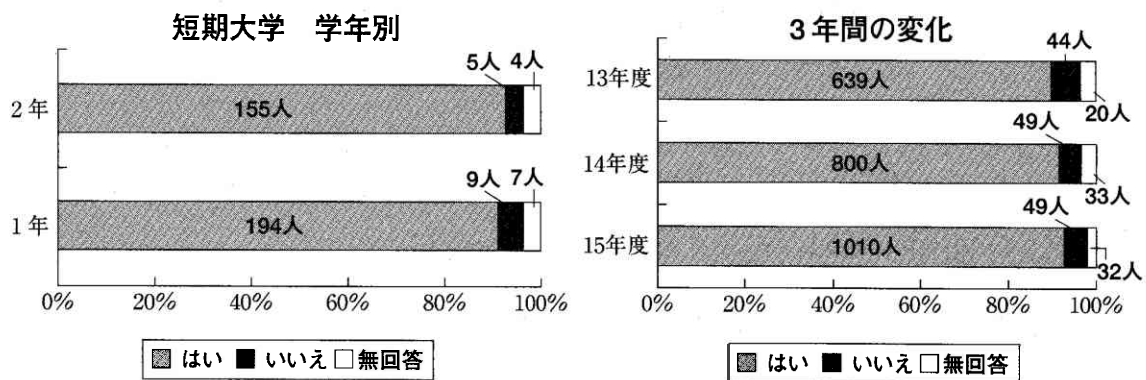


図13〔あなたの態度について〕あなたは、SAからの注意を素直に受けていますか。

2. 6 自由記述欄について

最後に、自由記述欄に学生が答えた内容について紹介する。この欄にはかなり多くの意見が寄せられた。学生のSAに対する期待の大きさが感じられる。

平成13年の自由記述は合計で152件、肯定的な意見が88件、否定的な意見は35件、要望事項が21件、その他が8件である。

肯定的な意見としては、「丁寧に教えて頂いてありがとうございました」、「いつもありがとうございます」、「優しく教えてくれたので居てくれてよかったです」などSAに対する感謝の言葉が多い。これは特に1年生に多かった。否定的な意見では、「質問したい時にSAがいない」、「質問がしにくい」、「SAの中でも（スキルの）個人差が大きい」、「えらそうである」等で、要望としては「もっとSAを増やしてほしい」、「誰がSAかわからないので、わかるようにしてほしい」等が出ている。SAには腕章や名札を付けることを義務づけるなど、存在がわかるような工夫をしてきたが、14年度以降にもこの記述が見られる。

平成14年度の自由記述は合計で181件、肯定的な意見が78件、否定的な意見は71件、要望が9件、その他が23件である。

肯定的な意見では、「助かっている」、「何でも知っていてすごい」、「とてもありがたい」等で、14年度も1年生、特に短期大学の1年生に好評であった。否定的な意見では、大きく二つに分かれ「困った時に教室にいないで本当に困った」、「誰がSAだかわからない」等と「SAによってスキルの足りない人がいると思う」、「SAのスキルがバラバラ」等の意見が出ており、特に「SAのスキルのレベル差」に対する苦情が増えている。また「もう少しやさしく教えてほしい」、「愛想が悪い。えらそう」などの意見も出てきた。13年度と同様に「もっとSAをふやしてほしい」という要望が多かった。その他では、「情報以外の授業でも特に実習ではSAがいたら良い」、「CADのできるSAにいてほしい」などがあった。CADの操作の質問は住居研究室に問い合わせるように学生には指導している

が、自習はパソコン教室で行っているため、距離的に遠い研究室に質問に行くのは学生としては不便なのであろう。

平成15年度は、自由記述が156件、肯定的な意見は65件、否定的な意見は73件、要望が11件、その他が7件である。内容的には他の年度とほとんど同じである。15年度も1年生は感謝の意見が大多数であるのに対し、上級生になるにつれ評価がきびしくなっている。特に「質問がしにくい」、「知識不足、無愛想」、「SAがパソコンの知識があるのは分かりませんが、教え方は別だと思う」などの意見が増えているのが目立つ。その他では、「日曜日も自習室を開けてほしい」等があった。

以上のように自由記述欄では、「質問したい時にSAがいない」と「SAのレベル差」の二つが問題点としてあがった。SAの数が適当であるかを質問した問11では、約3割の学生が「もっと多いほうが良い」と答えているが、パソコンの故障や、次の操作がわからなくなった時に「SAがいない」のは、学生にとって切実な問題であろう。SAを自習室に何人配置するかは非常に難しい問題であるが、今後も状況に応じて臨機応変に対応していきたいと思う。「SAのレベル差」については、特に上級生からの苦情が多く、「教え方」に対する個人差も問題になっていて、今後この問題については真剣に考えていく必要がある。

3. SA本人に対するアンケート調査結果

さらに過去3年間、SA本人に仕事に対する感想をアンケート形式で回答してもらっているため、その結果について報告する。

アンケート調査概要は下記のとおりである。

- ・ 調査の目的： SAとして働いている学生が、自分の仕事についてどのように感じているか
- ・ 調査対象： 大手前学園伊丹キャンパスでSAとして働いている学生
- ・ 調査方法： 学内配布・回収
- ・ 有効サンプル数：

年 度	SA数	回答数			回答率
		社会文化学部	短期大学	小 計	
平成13年	11	7	4	11	100%
平成14年	13	7	4	11	84%
平成15年	22	17	2	19	86%

- ・ 調査期間： 平成13年11月、平成14年11月、平成15年10月の3回、同じ内容で実施
- ・ アンケート用紙： 質問内容7項目および自由記述 別紙2参照

このアンケートはSA だけが対象者であり、サンプル数が少ないので、3年間の結果を通して考察する。

問1 「SA に対して受講生は」積極的か

図14がその結果である。「積極的に指導を求めてきた」という割合が最も多いのが平成14年度である。平成15年度はその割合が低くなっており、「指導・助言を求めてきたが積極的ではなかった」と答えるSA の数が増えている。学生のアンケートでは、「SA の数をもっと増やしてほしい」と答えている学生が多く、少し矛盾した結果になっている。

「SA によってレベル差があり、的確に答えてくれない」と答える学生が増えていることと関係しているように思われる。

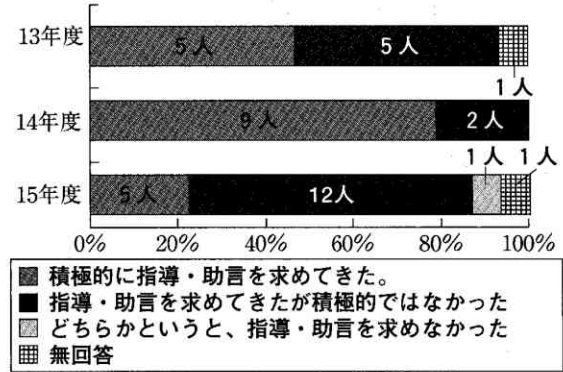


図14 SA に対して、受講生は

問2 「SA 制は、学生にとって」有益か

図15がその結果である。SA 制が学生にとって「有益だと思う」「どちらかといえば有益だと思う」と答えているSA がほぼ全員であることがわかる。これは学生が考えている答えと同じ結果であった。

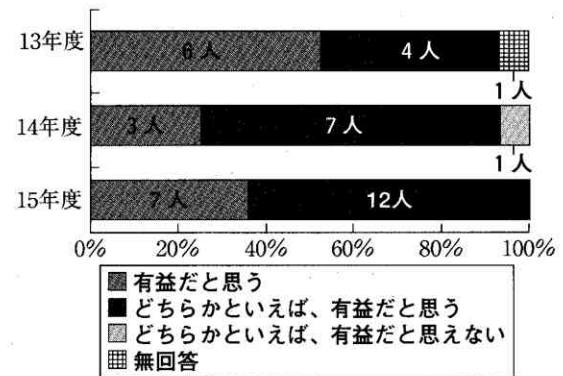


図15 SA 制は、学生にとって

問3 「SA を勤める側からみて、SA としての経験は、自分の研究・授業履修などに対し」有益か

図16がその結果である。SA の仕事をするに対して、「有益である」あるいは「将来、有益ではないかと思う」と答えているSA がほぼ全員であることがわかる。

SA の卒業後の就職先では、パソコンのインストラクター、SE 等、SA で得た技

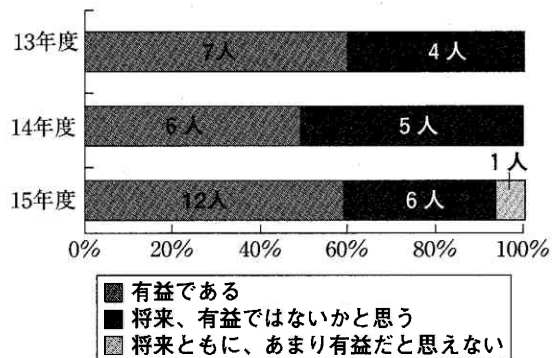


図16 SA を勤める側からみて、SA としての経験は、自分の研究・授業履修などに対し

術を利用した就職をする学生も多い。最近では高校の教科「情報」の教員を目指す学生がSAを希望する例も多く、今後も注目していきたい。

問4 「SAを勤めることは、学生の一人として自分の研究・授業履修などに対し」妨げになっていないか

図17がその結果である。13年度、14年度はSAの数も少なくSAに無理をお願いする場合もあったこともあり、「妨げとなることもあったが、たいしたことではなかった」と答える割合が多かったが、15年度には「妨げとならない」と考える学生が増えたのは望ましい結果である。

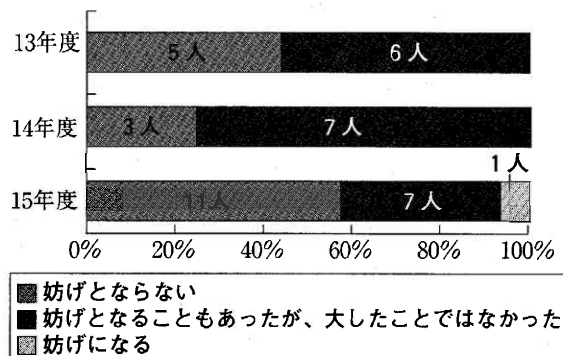


図17 SAを勤めることは、学生の一人として自分の研究・授業履修などに対し

問5 「各授業（実習・演習）の担当教員から、各SAへの説明等については」どうだったか

図18がその結果である。教員と授業のアシスタントの連携について、学生はうまくいっていると感じているという結果であったが、SA側からすると「もっと詳しい事前説明が必要である」と考えている割合も高く、非常勤の先生も含めてさらに連携を深める必要があるだろう。

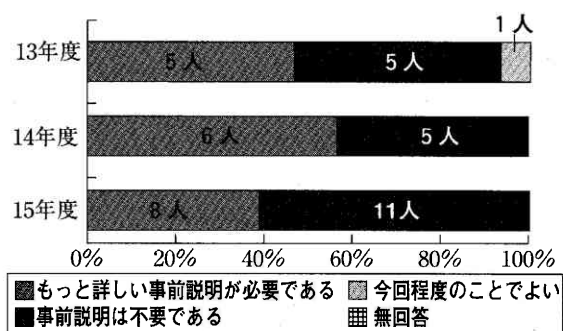


図18 各授業（実習・演習）の担当教員から、各SAへの説明等については

問6 「SAとして授業に参加した時間帯は、多忙でしたか？退屈でしたか？」

図19がその結果である。これは、授業アシスタントの数が適当であるかを問う質問であるが、年度により意見が分かれた。15年度には「まあまあである」が多くなっていること、学生アンケートにおいても授業アシスタントの評価は高いことから、授業アシスタントについては現

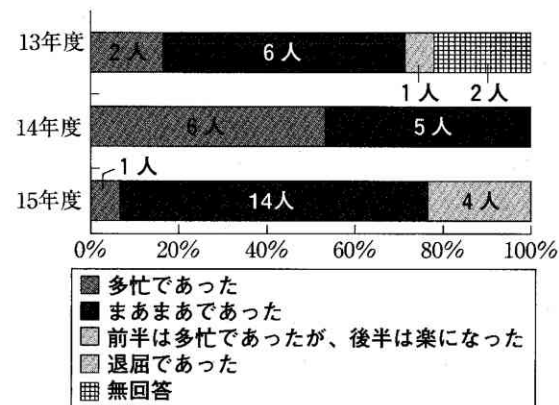


図19 SAとして授業に参加した時間帯は、多忙でしたか？退屈でしたか？

在の方法で進めたい。

問7 「SA の勤務について制限を設けた方が良いと思いますか？」

図20がその結果である。この質問は、学生が教員から SA を依頼されたら断れないと考えている問題や、教員側としては採用してから不適任と思われる場合に解雇しにくいなどの問題を解決する上で、SA を年間契約にすべきかどうかを検討するために質問項目として入れた。回答は、意見が分かれており判断は難しいが、現行の毎年継続の意思を確認するという方式を引き続きとっていくことにしたい。

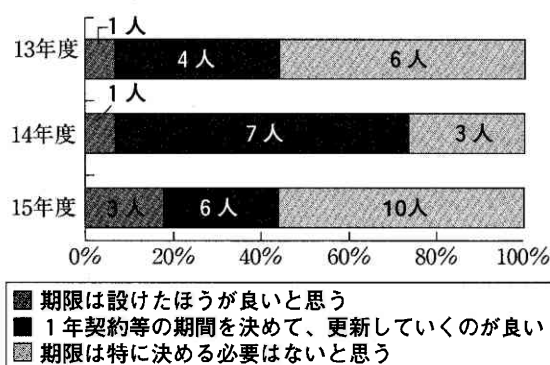


図20 SA の勤務について制限を設けた方が良いと思いますか？

自由記述欄

SA へのアンケートの自由記述欄では、3年を通して「SA のスキルレベルを近づけるべきだと思う」が最も多く、学生アンケートの自由記述欄と同じ結果であった。SA の勉強会は現在まで全員が揃う時間が難しいことなどから消極的であったが、今後さらに検討が必要であろう。また、「技術面よりも対人能力のある人選をした方が良い」という答えも毎年出ており、「スキル」と「対人能力」の二つの問題が、SA の自由記述欄においても問題点として浮き彫りになった。

4. まとめ

過去3年間のアンケート調査から総合的に評価すると、学生は SA に対して高い評価をしていることがわかった。特に評価が高いのはパソコン実習関連の授業アシスタントとしての仕事で、短期大学生や社会文化学部の1、2年生では8割から9割の学生が、アシスタントがいることにより授業にスムーズについていくことができたと答えている。

次に自習室のアシスタントでは3年間を通じて全学生の約7割が SA に質問しており、約9割の学生が SA の存在が役に立ったと答えている。

SA の必要性については3年間を通じて98%の学生が必要だと感じていると答えており、SA 制度はよく学生に浸透していて、評価できる制度であると確信することができた。

一方、アンケート全体の結果と自由記述欄などから読み取れることは、SA が大学院生の TA とは違い、同じ学年、あるいは下級生が仕事をしていることから、下級生にとっては非常に信頼できる、必要な存在であるのに対し、上級生からはスキルの問題や教え方に

ついてきびしい評価がなされていることがわかった。また SA の採用にあたっては、パソコンのスキルが高く、かつ人当たりの良い、教え方の上手な学生を選ぶということが求められており、人選を難しくしている。社会学部の開設時に、最終的には3、4年生の上級生だけで SA を運営する積もりで考えていたが、実際には就職活動や進学受験などのために4年生が定期的なシフトに入ることは難しく、3年生だけでは必修科目などの関係でシフトを埋めることができず、下級生を配置して埋めているのが現状である。TA とは違う難しさも浮き彫りになっている。

また SA のスキルの統一、向上、教え方の勉強については、学生と SA 本人双方のアンケートで問題点として出ていることから、今後は上級生の数名を指導役として定期的な勉強会を開くこと等を検討していく必要がある。

SA 制度は8年目を迎えたが、過去3年間のアンケートの評価をもとに、今後も教員・職員・SA が連携を密にして、キャンパス全体の学生の情報スキルの向上に役立つ制度になるよう考えていきたい。

謝辞

過去3年間の SA 制度アンケート調査の集計では、伊丹キャンパス共同研究室の阪本美恵子さんと松本英子さんに全面的にご協力を頂いた。ここに謝意を表します。

注

- 1) 平成8年に学術情報ネットワークを導入した当初は、OJNET : Otemae Judy's NETwork と言い、以後平成12年に OCNET : Otemae Educational Corporation NETwork と改名

キーワード：情報教育 スチューデント・アシスタント

Keywords : Information Technology Education, Student Assistant

大手前学園伊丹キャンパスにおける情報教育関係スチューデント・アシスタントの実態調査報告

別紙1 平成15年度 SA (スチューデントアシスタント) に関するアンケート (平成15年10月実施)

大手前大学・女子短期大学 情報教育委員会

このアンケートは、皆さんの情報スキル向上のために行うもので、今回はSAについて実施します。あなたの感想を率直に教えてください。

アンケート用紙記入について

- 1 学科、学年、性別については、該当する数字を○で囲んでください。
- 2 各設問に回答し、設問の後ろの口の欄に、数字で記入してください。
- 3 自由記入欄は各自が感じていることを自由に記入してください。

学 科	
社会文化学部	
1	人間環境学科
2	社会情報学科
女子短期大学	
3	生活文化学科

学 年	
1	1年生
2	2年生
3	3年生
4	4年生

性 別	
1	男
2	女

		設 問	回 答
自習時間について	1	SAに、あなたから質問や相談をしましたか。 1. はい 2. いいえ	
	2	SAは、あなたが質問したい時に自習室にいましたか。 1. はい 2. いいえ	
	3	SAは、あなたの質問に適切に答えましたか。 1. 非常に適切であった 2. まあまあ良かった 3. 良くなかった	
	4	SAの存在があなたの役に立ったと思いますか。 1. 非常に役に立った 2. まあまあ役に立った 3. いてもいなくても同じ	
	5	あなたは、SAに質問しやすいですか。 1. はい 2. ふう 3. いいえ	
授業アシスタントについて	6	SAは、質問に適切に答えましたか。(質問した人のみ教えてください) 1. 非常に適切であった 2. まあまあ良かった 3. 良くなかった	
	7	SAがいることで、スムーズに授業について行くことができましたか。(質問した人のみ教えてください) 1. はい 2. いいえ	
	8	SAと担当教員の連携はうまくいっていると思いませんか。 1. うまくいっていると思った 2. 何も感じなかった 3. 良くなかった	
SAのスキル	9	SAは専門知識やスキルを持っていると思いませんか。 1. はい 2. ふう 3. いいえ	
SAの必要性	10	SAは必要だと思いますか。 1. 非常に必要である 2. まあまあ必要である 3. 必要でない	
	11	自習時にSAが必要だと思った人のみ回答してください。 1. もっと多いほうが良い 2. 適当である 3. もっと少ないほうが良い	
あなたの態度について	12	あなたは、実習室のルール(飲食厳禁など)を守っていますか。 1. はい 2. いいえ	
	13	あなたは、SAからの注意を素直に受けていますか。 1. はい 2. いいえ	

自由記入欄

SAについてあなたが感じたことを自由にお書きください。

大手前学園伊丹キャンパスにおける情報教育関係スチューデント・アシスタントの実態調査報告

別紙2 平成15年度 SA (スチューデントアシスタント) へのアンケート (平成15年10月実施)

大手前大学・女子短期大学 情報教育委員会

このアンケートは、皆さんの情報スキル向上のために行うもので、今回はSAについて実施します。あなたの感想を率直に教えてください。

- アンケート用紙記入について
- 1 学科、学年、性別については、該当する数字を○で囲んでください。
 - 2 各設問に回答し、設問の後ろの□の欄に、数字で記入してください。
 - 3 自由記入欄は各自が感じていることを自由に記入してください。

学 科		学 年		性 別	
社会文化学部		1	1年生	1	男
1	人間環境学科	2	2年生	2	女
2	社会情報学科	3	3年生		
女子短期大学		4	4年生		
3	生活文化学科				

設 問		回 答
1	SAに対して、受講生は 1. 積極的に指導・助言を求めてきた 2. 指導・助言を求めてもきたが、積極的ではなかった 3. どちらかという、指導・助言を求めなかった	
2	SA制は、学生にとって 1. 有益だと思う 2. どちらかといえば、有益だと思う 3. どちらかといえば、有益だと思えない	
3	SAを勤める側からみて、SAとしての経験は、自分の研究・学習にとって 1. 有益であると思う 2. 将来、有益ではないかと思う 3. 将来ともに、あまり有益だと思えない	
4	SAを勤めることは、学生の一人としての自分の研究・授業履修などに対し 1. 妨げとならない 2. 妨げとなることもあったが、大したことはなかった 3. 妨げになる	
5	各授業(実習・演習)の担当教員から、各SAへの説明等については 1. 各時間の授業目的・方法等について、もっと詳しい事前説明が必要である 2. 各時間の授業目的・方法等については、今回程度のことでよい 3. 各次官の授業目的・方法等についての事前説明は不要である	
6	SAとして授業に参加した時間帯は、 多忙でしたか? 退屈でしたか? 1. 多忙であった 2. まあまあであった 3. 前半は多忙であったが、後半は楽になった 4. 退屈であった	
7	SAの勤務について期限を設けた方がよいと思いますか? 1. 期限は設けた方がよいと思う 2. 1年契約等の期間を決めて、更新していくのがよい 3. 期限は、特に決める必要はないと思う	

自由記入欄

上記の質問も含めて、今のSAについて問題点、意見などを書いてください。